

怖れず作る

七田谷まりうす

いささか唐突な言い条ながら、毎週毎週投句される俳句作品の数はどれ位であろうか。結社の例会、各地句会、カルチャー教室等に寄せられる投句数を足し合わせれば、毎週十萬句を軽く超える作品が量産されている、との説が有力である。気が遠くなるような話であり、活気があつて詩壇などと異なり俳壇はますます隆盛との評価がある一方、優劣が付け難い文芸であるだけに選に入るかどうかを競うバクチの魔力にウツツを抜かしているのかと訝る人もあろう。

膨大な数の作品が生み出される中で、最短詩型という「型」の文芸であるだけに、また、人間の思考回路や情念の置き所など概して似通っているが故に、類想類句はこの文芸のいわば宿命である。俳句大会等で顕彰された作品がしばらくして取り消される事例が絶えないのも宜なるかなと思ふ。

ともあれ、類想は発想、着想の類似性、類句は発想よりも「型」としての類似性にウエイトが置かれるということかと思ふが、そうした類似性はどのようにして生じるのか。俳句入門から五年ないし十年の期間は習練の時であり、先達から学ぶ、学ぶとはまねぶ（まねをする、見習つて行う）ことであり、類似性は、「型」の文芸との性格とも相俟って免れ難いということか。ある長老の言を引用すれば、「初心から五年ないし十年は、突き離して言えば、類想類句の作品をひたすら作り続ける期間であり、そこでしっかりと『型』とか『描写』による感動の再現力」を身に付けるかどうかのポイントであり、詩心に溺れる前に、『型』や『描写』の習練を積むことが肝要、楽しみ、慰みで作句する場合はご自由に、としか申し上げられないが、『型』を忘れたカナリヤになつてしまつてはどうしようもない」ということか。

右の挑戦的な発言を全面的に首肯するわけではないが、傾聴に値する発言である。型に入つて型を出るとの言い方もある種の修辭（レトリック）であるが、ある期間の習練が大切、従つて、先人の秀品を片はしから覚え、一つの物差しを自らの心に蓄積する、との初心者指導は説得性があるやり方と思う。ただ、その物差しが深層心理に影響し、時に類想類句の作品を生む源となるケースがある点に留意の要があろう。また、初学の頃、感動した作品は忘れたようでも深層に残つていて時間差をもつてふつと蘇る、感動した作品であるだけに、先行句と全く同じでも気付かず「我ながら良い出来だ」などと思つてしまい、あとで他の人から指摘される、といったケースもあるようだ。そうした意味でも俳句は何とも厄介な、悪く言えば安易な文芸なのである。

こうした特性を逆手に取つて言えば、類想類句を恐れたいなら何も出来ない。それを恐れずに作り、結果として、先行句が判明し、上五中七まで同じといった場合は、あっさり自ら取り消すのがルールであらう。

では、どうすれば、そうした類似性を避けられるか。独自性を出そうとすると、それはそれで独りよがり、自己陶醉の作品となりがちである。やはり、習練の果てに賜る、境涯の果てに浮かぶ、例えば、久保田万太郎の

〈湯豆腐やいのちのはてのうすあかり〉のケースのようでありたい。賜るチャンスを待つしかないのだらう。生涯にまはり燈籠の句一つもあれば良しとする心境でありたいと言ふことか。

最後に、カルチャー教室での設問のようで恐縮ながら、次の句を読み比べて頂きたい。

- ① はつ午や煮しめてうまき焼豆腐 久保田万太郎
初午や煮つめてうまき焼豆腐 小沢 碧童
② 旅びとの覗きてゆける雛かな 久保田万太郎
旅人の窓よりのぞく雛かな 白雄（春秋庵）

この二つのケースについては、水原秋櫻子のエッセイ「俳句で煮しめた顔」および演劇人龍岡晋著の「切山椒」に興味深い件りが出て来る。①のケースにつき秋櫻子は「この二句の相違は、『煮しめて』と『煮つめて』のたった一字だけである」、「将来初午という行事が、市井から消えてしまったとき、どちらの句が、あの気分を正確に回想させることが出来るかといえは、それは『煮しめてうまき』の句」と述べている。②のケースも「窓」との措辞がやや鬱陶しいかも知れず、碧童、白雄とも秀品が多い中で、このケースでは損な役回りながら、読者諸賢のご感想はどうでありましょうか。